

教員の働き方を考える ―オーストラリア・ビクトリア州の学校視察から―

藤本 睦子（本学教職研究科准教授 教育学）

今夏、オーストラリア・ビクトリア州（メルボルン）の 4 校の中高一貫校を訪問した。今回の訪問を思い立った最大の理由は、日本で教員の働き方改革が進められる中、海外の教員がどのような働き方をしているのかを知りたいと考えたからである。

15 年前、ビクトリア州の Mornington Secondary College（公立中高一貫校）で約 10 日間過ごす機会があった。現地の教育制度や学校運営に触れる中で、日本との教育環境の違いを実感するとともに、それまでの自分にはなかった新たな教育観を得ることができた。特に、現地校の教員との交流を通して、教科の専門家として高い専門性と誇りを持ちながら、自身の時間も大切に作る姿勢に強い衝撃を受けた。教員たちは勤務時間が終了すると速やかに退勤し、家庭や趣味などの時間を大切にしていた。当時の私にとって、そのような働き方は新鮮であり、自身の仕事に対する考え方を見直すきっかけとなった。また、仕事と私生活を明確に切り分けることが、仕事への意欲や集中力の向上にもつながることを実感した。

現在、日本では教員不足が大きな社会問題となっている。教員という職業の魅力を高め、働きやすく働きたいのある職業とするため、さまざまな施策が進められている。しかし、文部科学省の「令和 7 年度『教師不足』に関する実態調査」が示すように、依然として厳しい状況が続いている。教師不足の解消に向けては、学校における働き方改革の推進、処遇改善、学校の指導・運営体制の充実、教員の育成支援などの取組が進められている。これらの施策を見ていると、15 年前に出会ったビクトリア州の教員の働き方と共通する点が多いことに気付かされる。

そこで今回、訪問した 4 校の管理職に対して、ビクトリア州における教員の働き方やその支援体制について質問した。その回答として、「仕事とプライベートの時間を明確に分ける文化が根付いており、勤務時間終

了後は家族や趣味の時間を優先すること」、「子育てや家庭の事情への理解があり、勤務時間の調整や急な休暇にも柔軟に対応できること」、「男女を問わず育児休業を取得しやすく、仕事と生活の調和を重視する文化が社会全体に浸透していること」などが挙げられた。

日本においても、「教育職員が子どもたちと向き合う時間や自己研鑽の時間を確保できるよう、校務運営の効率化や部活動改革などを進めることが重要である」とされている。また、時間外勤務の縮減だけでなく、年次有給休暇の取得促進などを通して、ワーク・ライフ・バランスの充実に図る必要性も指摘されている。教員の働き方改革は、単に労働時間を減らすことだけを目的とするものではない。教員が心身ともに充実した状態で教育活動に取り組める環境を整えることこそが重要である。その結果として、教員という職業の魅力が高まり、教員不足の改善にもつながることを期待したい。

一方で、オーストラリアにおいても、日本と同様にコロナ禍以降、教員不足が課題となっている。オーストラリアでは教育行政の多くが州政府の管轄であり、教員の給与や労働条件も州ごとに定められている。そのため、州間で人材確保競争が生じている。また、ビクトリア州の公立学校では、学校ごとに教員を採用する仕組みが採られており、人材確保のあり方も日本とは異なっている。今回の訪問校や、ビクトリア州で教員経験のある現地在住の邦人から話を聞くと、経済格差に起因する教育格差や人材確保の問題など、オーストラリアも日本と共通する課題を抱えていることが分かった。また、ビクトリア州では 2021 年から大規模な教育改革が進められているという。

今後、その成果がどのように実を結ぶのか注目していきたい。そして、機会があれば再びメルボルンを訪れ、学校現場の変化を自分の目で確かめたいと思う。